魔法少女リリカルなのはぷらす

瞬照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはぷらす

【Nコード】

N2857X

【作者名】

瞬照

【あらすじ】

それは、ごく平凡な小学三年生だった高町ひかるに起こった事件。助けたのはとても小さな女の子。出会いがもたらす運命が今動き始める。

無印第1話『それは不思議な出会いなの』（前書き）

下手ですが頑張っていると思います。

無印第1話『それは不思議な出会いなの』

第1話「夢の中での出会いなの？」

辺りが寝静まった夜遅く

森の中で小さな女の子が手から血を流していた。

すると

赤い目をした黒い生き物が林の奥からこちらを伺っていた。

それに気付いた女の子はどこからか白い宝石を取り出す。

ポッ

白い宝石が光ると女の子の足下が光り出す。

その時、黒い生き物は近くの林から飛び出し襲いかかってきた。

「っ……………対なる響き光となれ、許さざる者を封印の輪に」

女の子が何を唱えだす。黒い生き物はもう目の前に迫っていた。

「ジュエルシード封印!!」

そして、女の子と黒い生き物はぶつかった。

ぶつかり合ったところが眩い光を放ち辺りを照らしす。

「ギヤアアアアア!!」

黒い生き物は大きく弾き飛ばされる。

辺りには黒い生き物の肉片が散らばっていた。

黒い生き物は弱った体を引き摺るように逃げて行く。

「逃がし………ちゃった………追わ………ないと………」

そう言いながら女の子はその場に力なく倒れる。

「誰………か………私の………声を………………力を………貸して………
魔法の………力を」

なのは「ひかるー、朝だよー!!」

誰かが僕の体を揺する

「あと5分………ZZZZZ………」

定番の文句を言う僕に、彼女はいつも通りの行動に出る

なのは「あと5分も寝たらご飯食べれないよ、だから、起きて
」!

思いつきり掛け布団を僕から取り上げる

『もっ………』

掛け布団なしではあまり寝れないので仕方なく渋々体を起こす。

なのは「おはよーひかる、すぐに降りてきてね。ご飯もつできてるよ」

なのははそう言つと部屋から出て来た。

僕はまだ意識が覚醒するところなくウトウトしながら制服に着替えるとリビングに降りた。

『おはよう………ZZZZ………』

半分まだ寝た状態でリビングに入ると母さんとなのはが朝食を準備していた。

「おはよう、ひかる」

「おはよう、ひかる。顔洗ってらっしゃい、それから恭也たちを呼んで来て」

この2人は、高町夫妻。

男の人はお父さんの

高町士郎さん。駅前喫茶翠屋のマスターさんで高町家の大黒柱さんです。

女の人はお母さんの高町桃子さん。 喫茶翠屋のお菓子職人さんで

綺麗でいつも優しいお母さん。

『……………う……………ん……………zz……………』

フラフラしながら洗面所に向かった。

洗面所で完全に起きた僕はその足で庭先にある道場に向かった。

『兄さん、姉さん、おはよう。ご飯だよ。はい』

稽古を終えた2人にタオルを投げる。

この二人

「おはよう、ひかる。サンキュー」

この男の人は、高町恭也さん。大学1年生で父さん直伝の剣術家で姉さんのお師匠さん。

でもう一人が

「おはよう、ありがとう。」

姉さんの高町美由紀さん

高校2年生

高町家リビング

「うーん、今朝もおいしいな。特にこのスクランブルエッグが」

「本当？トッピングのトマトとチーズそれにバジルが隠し味なの」

「みんなあれだぞ、こんな料理上手なお母さん持って幸せなんだからな、わかってんのか」

とまあこんな感じで両親はまだ新婚気分バリバリです。

「なのは、ひかる、そろそろ出ないとバスに遅れるぞ」

「ふえ、本当に!？」

『本当だ、なのは急ごう』

時間はすでにバスまで20分を切っていた。すでに準備が出来ていた僕は玄関でまだゴソゴソしていたなのはを待つことにした。

「ごめん、お待たせ」

『忘れ物ない?』

「うん」

そしていつものように手を繋いで家を出た

プップ

「はあはあ、間に合ったね」

『なのは、頼むからもうちょっと早くご飯食べてね』

「ふう……「じめんなわこ」

『「おはようございます」』

揃って運転手さんに挨拶する。すると奥から僕たちを呼ぶ声がする。

「なのはちゃん、ひかるくん」

振り向くと一番後ろの席からすずかとアリサが手を降っていた。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

『おはよう、すずか、それとアリサ』

「おはようって、かなりいいね」

『ぶん……』

「まあまあ。ひかるくんアリサちゃんに意地悪したら駄目だよ」
隣に座っていたさすがが優しく注意してきた。とさすがが苦笑しながら注意してくる。

『まあさすががそい言うなら』
後ろからなのはが楽しいそつに中に入ってきた。

「ふふ、ひかるは、さすがちゃんの隣にアリサちゃんが座ってるのが気に入らないんだよね」

「なのは！！！！」

「！！！！」

「なんだ、だったら言ってくれたら良かったのに」
アリサがからかうような目でこつちを見て来る。さすがの方を見ると、真っ赤になって俯いていた。

なんで朝からこんな仕打ちを

でも恥ずかしくても学校に向かうまで少しの間、ひかるの手はしっかりさすがの手を握っていた。

昼休み

いつものように4人で屋上でお昼ご飯を食べていた。席は右端から、なのは、僕、すずか、アリサだ

「将来かあ……」

と呟きながら弁当のおかずをつついていた。午前中の授業が将来の夢についてだったのでそれについて悩んでいるみたいだ。

なのはたちが将来についてあれこれ話しているのを聞きながら自分の将来について考えていた。

僕も父さんの跡を継ぐのかな

と考えていたら不意に目の前をスライスレモンが高速で通過した。

『うわあ!?!』

「バカちゃん!」

どうやらアリサがなのはに投げつけたみたいだ。どうせまたなのはが自虐的なことを言ったのだろう。

「自分でそういうことを言うんじゃないの」

「そつだよ、なのはちゃんにしか出来ないことがきつとあると思っ
よ」

2人が励ましていた。

「うん・・・」

「それに理系の成績はこのあたしより上なのにそんなことを言うて
るのはこの口か！」

アリサが座っていたなのはの膝に乘りに頬っぺたを引っ張っていた。

「ふええ、やめて、やめてよ」

「もつひかるも見てないで一緒に止めて」

『ああ、ごめんごめん。アリサその辺にしておかないとなのはが、
飯食べれないよ』

「わかってるわよ、ひかるこそどつなのよ、なっきからずつと黙っ
てるだけじゃん！」

おおい、矛先が俺に向いた。

『俺は……たぶん父さんと同じボディガードかな』

「確かひかる君たちのお父さんって……」

「そうよ、士郎さんってその手の業界じゃあかなり有名よ」

「もう引退したけどね、今は兄さんが跡を継いでるんだ」

「お兄ちゃんの今の警護対象が忍さん」

「その前は、確かフィアッセだったよな」

「フィアッセって、フィアッセ・クリステラ！？あの世界的歌手の？」

「う、うん。お兄ちゃんとお姉ちゃんの幼なじみなんだ それには
ら前に翠屋で働いていた外国人さん」

「あの人がフィアッセだったの！？すずか知ってた？」

「うん。なんとなくだけど。アリサちゃん、気付かなかったの？」

「似てると思ったけどそんな近くにいるなんて想像もしてなかった」

「近いうちにまた来るって言ってたからその時に紹介してあげるね」

「絶対よ。わたしずっとファンだったんだから」

「わかったよ」

放課後

校門でなのはたちと落ち合ってたわいのない話しをしながらなのは達は塾に、俺は家を目指していた。

「ひかる君はこれから稽古？」

『うん、今日は父さんが見てくれる日なんだ』

「そっか、頑張ってるね。私も終わったらメールするからね」
『うん。すずかもお稽古頑張ってるね』

『じゃあ、僕こっちだから。なのは先に帰ってるからな』

「うん」

「ひかる君、また明日ね」

「じゃあね」

『ああ、また明日』
頷いて歩き出した。

ドッケンー!!
いつも通り公園の中を通り出口に近づいた時に突然胸に痛みが走った。

『!』

胸を押さえてその場につづくまる。

(誰か・・・)

「!？」

辺りを見るが誰もいない。

(お願い・・・)

(……………来て……………早く……………)

『!』

僕は聞こえてくる声を頼りに走り出した。

道を逸れ、林を抜け茂みの中を進む

(お願い・・・誰か・・・)

『!』

近づいて茂みを掻き分ける。するとそこには、とても小さな傷だらけの女の子が倒れていた。

「妖精さん？」

『怪我してる』

ひかるの部屋

公園で出会った妖精?のような女の子を家へと連れ帰り、女の子の手当てをして、綿を詰めたバスケットの中で寝かせている。

お人形みたいな女の子だなー

公園から知らない間に付いてきていた白い宝石は、ずっとこの子横で心配そうに浮かんでいた。

「……ん……」

『気がついた？』

「はい」

『とりあえず自己紹介するね、僕は高町ひかる、9歳。私立聖祥大附属小学校3年生』

「私は、ミーナ。この子はライオンハートです。」

「これはあなたが？」

手当てされた怪我を見て言った。

『そつだよ。助けを呼んだ声があるほうに行ったら君が倒れていたんだ』

「そつだったんですか・・・、ありがとうございます。」

『いいよ、気にしないで』

「あの・・・助けてもらってこんなことを言うのもなんですが・・・あなたに頼みたいことがあるのです」

『いいよ』

即答した僕、彼女は驚いた。

「えっ」

『お父さんの教えにね、困ってる人は考える前に助けろってあるんだよ。だから僕は君を助けるよ』

「えっ……でも……」

『大丈夫、それが僕の運命だったんだよ』

彼女はそれを聞いて決心したのかあることを話始めた。

「これから言うことは全て本当のことです。なので、驚かずに聞いてください」

僕はその言葉につなずく。

「私は、この地球の者ではありません。遠い世界からある物を探してこの世界にやって来ました。その物の名前は、ジュエルシード。魔法の力を高め、悪用すれば世界を滅ぼす力を持ったロストロギアと呼ばれる物です。」

『魔法ってあの？』

「はい、私達の世界では科学の他に魔法の文明が発達しているので

す。この地球では余り見受けられないものですが。でも、あなたにはその魔力があるのです。」

『僕に魔力が！？そんな感じ全くないけど』

「あなたは、とても良い魔力資質を持っていらっしやいます。まだ覚醒はされてませんが」

『そうなんだ・・・』

「魔力資質がなかったら、あの時私の声は聞こえませんか。その証拠に」

（また、私の声が聞こえているはずです）

「ほんとだ、また頭の中に君の声が聞こえる」

（これは念話と呼ばれる一般的な魔法です。）

（ライオンハートを手にとって心で話しかけてみてください）

ライオンハートを優しい握り胸に置いた。

(じつ?)

(そつです)

ドタバタドタバタ

『?』

窓から玄関の方を見てみるとなのはが出て行っていた。

『どうしたんだろう? まあすぐに帰ってくるよな』

それからひかるは、ミーナから魔法について色々聞いていた。

トントン!

(誰か来た!?)

(か、隠れて!)

(は、はい)

慌ててミーナに隠れるように言い、ライオンハートをポケットにねじ込んだ。

『開いてるよ』

恭也「ひかる、なのはを見なかったか」

『なのはならさっき出ていったよ』

「はあ、すまないが、もう遅いし捜してきてくれないか？」

『わかった』

「じゃあ頼んだよ」

(もう大丈夫だよ)

ミーナがベットの下から出てきた。

『とりあえず、なのはを捜しに行くから、話はまた後でね。
ミーナたちはどっする』

「一緒に行きます」

【お供します】

『ライオンハートって喋れたんだ！？じゃあ行くっか』

「はい」

無印第2話『夢の中は危険なの』

第2話「夢の中は危険なの」

動物病院の近く

「僕たちの使う魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そして、そのプログラムを発動するために必要なのは術者の精神エネルギーです」

フェレットを抱えながら必死に走って逃げる

「攻撃と防御はほど自動で行ってくれますが、より強い強力な魔法を使うなら呪文による詠唱が必要なんです」

「ふえええ、いったいどうしたらいいの？」

「とにかく、封印を。心を澄ませてそうすれば呪文が浮かぶから」

「……………」

黒い生き物がなのはを見つかけ飛びかかろうとしていた。

「リリカル！マジカル！」

「封印すべきは、忌まわしき器、ジュエルシード」

「封印すべきは、忌まわしき器、ジュエルシード」

「Sealing Mode Setup」

レイジングハートから多数のピンクの帯が伸び黒い生き物を絡め捕る。

「ジュエルシード、シリアル21」

封印！！！！

レイジングハートから大きなエネルギー波が黒い生き物に直撃し、ピンクの粒子となって消滅した。

そして跡には、青いひし形の宝石だけが残っていた。

「これがジュエルシードです、レイジングハートで触れて」

そう言われてレイジングハートを前に出す。

「Receipt number XXI」

ジュエルシードがレイジングハートの中に消えた。そしてなのはもレイジングハートも元の姿に戻っていた。

ほっとなのはが一息着こうとしたときだった。

『な〜のは〜!』

「ひゃああ!」

明らかに機嫌が悪そうなひかるが後ろからなのはの頭を拳でグリグリしていた。

「ひ、ひかる。ふえええ、ちょっとちょっと待って」

なのは手をバタバタさせて抗議してくるので攻撃を止めると向き直った。

「やっぱり怒ってる?」

『当たり前、今何時だと思ってるんだよ』

ふとなのはが何を抱いていることに気がついた。

『フエレット?』

「……………」

『ハア〜とにかく帰るぞ、兄さんの説教が待ってる』

「うん」

『一緒に怒られてやるから』

「ありがとう／＼」

翌日

高町家

『おは……………ようZZZZ……………』 いつも呆けたひかるが降りてきた。

昨日は私と一緒に怒られて遅くなったからいつもより凄いことに『う……………ん……………』 ひかるは目を閉じたまま自分の席に着き食事を始めていた朝しか見られない無防備なひかるの姿である。

制服には着替えているもののボタンがズレていたり靴下に至っては

片方しか履いていない。

「ひかる、ボタズレてるよ、あともう片方の靴下は？」

『……………んんん……………』

自分のポケットから出す。

なんでポケットに……

「はは、ひかるは相変わらずだな」

「もうお父さん、そんなこと言っていないでひかるを怒ってよ」

「無理だよ、こんな可愛いひかるは朝しか見れないじゃあないか」

「なのは、ひかるを洗面所に連れて行ってあげて。また寝てるわ」

そうお母さんに言われてひかるの方を見ると

箸を上げたまま固まっていた。

『ZZZZZ・・・ZZZZZ・・・』

「ハア」

学校

(ミーナ、聞こえる?)

(はい、どうかしましたか)

ちなみにミーナはカバンの中にいる。

ミーナにとってこの世

界は初めて見るものばかりでいろんな興味津々みたいだ。

(この間の話し、一晩考えて決めたんだ。僕に魔法を教えてください?)

(いいんですか?もしかしたらひかるさんの生活が変わってしまうかもしれないですよ……)

(もしここで何もしなかったら何年かしたら絶対に後悔する)

(後悔だけはしたくないんだ。それに僕の魔力でミーナが助かるのなら)

それは昨日の夜のことだった。

昨日の夜 恭也のお説教を聞いた後、ミーナたちのことを聞いていた。

ミーナとライオンハートは、ジュエルシードの守護者としてつい最近まで別の世界の遺跡の中でジュエルシードと共に眠っていた。しかし、ある者がジュエルシードの封印を破り持ち出してしまったのに気付いたミーナたちは、ジュエルシードを取り返すために各世界を探しまわり、とうとうこの地球にあるということ突き止めたのだった。

だが、発動してしまったジュエルシードに対抗することが出来ず、

公園で弱っているところをひかるに保護してもらったというわけだ。

(ありがとうございます)

(じゃあ、さっそく学校が終わったら近くの神社で)

(はい)

神社

「ミィ」まず、ひかるさんをデバイサーとしての登録を行います。」

『っっ』

ひかるの足下に三角形の魔法陣が展開された。

「新規管理者登録

高町ひかる

魔法方式

ベル方式

では、次から言うことを復唱してください」

「大空に輝く太陽は大地を照らし」

『大空に輝く太陽は大地を照らし』

夜空の月は闇を照らす 『夜空の月を闇を照らす』

『「全てを照らす光はこの胸に！」』

『「ライオンハート、セット アップ！」』

「stand by ready set up」

ひかるから出た強烈な光が雲を突き抜けた。

「凄い」

光から現れたひかるは、白を基調した服を身に纏っていた。更に左手には、ガンブレードが握られていた。

『おお、服が変わった！？それにこれ』

「服は騎士甲冑と呼ばれるベルカの騎士の服です。あとそれはデバイスです。ベルカの騎士の力の源、魔法を使用する時に使う、いわば魔法の杖みたいなものです」

『へえ〜』

ガンブレードを軽く振ってみた。

『長さも重さもしっくりくるな。凄いよライオンハート』

「Thank you」

さっそくミイーナはレクチャーに入った。

「じゃあまずは空を飛んでみましょうか、心の中で自分が空を自由に飛び回ってる姿をイメージしてください」

『う、うん。』

「イメージが固まれば、あとはライオンハートがそれを読み取って発動してくれます」

『……………』

しばらくするとゆっくりとひかるの体が宙に浮き始めどんどん上昇していく。

「後はどう飛ぶか思い描けば、その通りに飛ぶことができます」

『じゃあこんな感じで』

ミイーナはひかるの飛行を見て驚愕した。とにかく速い、今日が初めてとは思えない軌道を描いた。

しばらく空を飛び回っているとライオンハートが何かを見つけた。

【マスター！】

『あれは』

眼下の神社で黒い生き物が気絶して倒れている女性を食い殺そうと
していた。

『助けないと、どうすればいいの？』

「ここは任せてください。」

ミイーナは遠隔操作で生き物と女性の間には障壁を展開した。

障壁に阻まれ黒い生き物は大きく後退した。

『なんだあれ!?!』

「……あれは恐らく思念体です。生き物の不の感情の集合体。私達が探しているジュエルシードの力によるものです。」

獲物をひかるたちに切り替えた黒い生き物が突進してくる。

くっかわせない

彼の後ろにはまだ女性が倒れていた。

「p r o t e c t i o n」

またさっきの障壁と同じものが展開され黒い生き物を弾く。

『ライオンハート、お前がやったのか』

【はろ】

「ひかるさん、ユニゾンします」

『えっユニゾンって?』

「説明はあとです。とにかくあれを何とかしないと」

『わかった。でどうするればいい?』

「なにも、ただじっとして下さい」

ミイーナを包むように光が集まって玉のような物になった。

「ユニゾン・インー!」

光の玉がひかるの中に入った。するとひかるの髪や目の色、騎士
甲冑が変化した。

『凄いい!?!』

(驚いてないで、前見て下さい!)

『は、はい!』

慌ててライオンハートを握りなおす。

(一発でけりをつけましょう。ライオンハートにカートリッジ・ロ
ードを命令して下さい。)

『うん。ライオンハート、カートリッジ・ロード!』

「all right」

ガシャン ライオンハートから一本の薬莖が弾き出される。

するとライオンハートの全体が白く光出した。

（あとは、あなたがイメージする攻撃をライオンハートが読み取って具現化してくれます）

『……わかった』

（来ます！！）

『シャイニングブレード！！』

ライオンハートが纏っていた光が刃となり黒い生き物に襲いかかった。

「ギヤアアアア」

黒い生き物は断末魔と共に真っ二つになる。

ライオンハートから廃熱の煙が吐き出される。

『すげー！…！』

「これがひかるさんの力です。私の想像を遥かに超えています」

黒い生き物は白い粒子となって消え跡にはひし形の結晶が浮かんでいた。

『ミイナ、これは？』

「どうぞやらこれがジュエルシードです。ライオンハートで封印してください。ライオンハートをかざして下さい。」

結晶にライオンハートをかざす

「Sealing」

なのは「あ〜」

後ろを振り向くと、そこには……

『わあ！？なのは！』

「えっ私のこと知ってるんですか」

『えっ』

ライオンハートに映った自分の姿を見た。

白い髪に白い目　　まるで別人だな

(ユニゾンしているから髪や目の色が変わるんです)

(そうなんだ、早く言ってくれよ)

「あの、さっきのやつ。ジュエルシールドをどつするつもりなんです
か」

「それはとても危険な物なんだ」
「なのは肩に乗っていたフレットが鋭い目をしてこっちを睨んで
くる。」

(　フレットが喋った!?)

(　世の中って広いですね)

(ミューナ どうしたらいい？)

(どういふ言われても、とにかくここは逃げましょう)

(賛成、このままなのは前にいたらボロが出そう)

「 あっ待って 」 なのはの制止を振り切り飛び立った。

無印第3話『町には危険がいっぱいの』

第3話「町には危険がいっぱいの」

ひかるの部屋

神社でなのはに遭遇してから数日。今日は、ミィーナ達と知り合っ
て初めての週末。朝朝食を取ったひかるはすぐに何処かに出かける
準備を始めていた。

「ひかるさん、こんなに早く準備されてどうしたんですか？なのは
さん達との約束は11時のはずでは？」

部屋の時計はまだ9時を過ぎたばかりだった。

44

『その前にすずかと公園で待ち合わせしてるんだ。その後、なのは
やアリサと一緒に父さんのサッカーチームの応援に行くんだ』

すでにあの寝起きモードは解除され普段のひかるになっていた。

「サッカーってスポーツか何かですか」

『そつだよ、まあ百聞は一見にしかず。ミィーナもおいで』

「はい」

ミイーナをカバンの中に入れ、ライオンハートを首からかけわからないように服の中に隠し、部屋を出た。

鳴海臨海公園

公園に着き、時計を確認する。

9時30分

約束の10時までまだ30分もある。

（ひかるさん、なんだか楽しそうですね）

（まあ、ね、2人きりになれる時間が少ないからね）

走り出しそんな気持ちを抑えながら待ち合わせの場所へ向かう。

待ち合わせの場所に行ってみるとすでにすずかが待っていた。

『すずか』

「ひかるくん」

『じめん、待たせちゃったね』

「ううん、そんなことないよ」 笑顔

ピース か、可愛い／＼／すずかの服は可愛いフリルのついた白のワンピース

「...?」

心配そうに覗き込んで来る

『ごめすしに...可愛いよ／＼／』

「ありがとう／＼／」

2人は手を繋ぎ歩き出した。

そんな2人を草陰から見つめる二つの視線

「やっぱり2人でイチャイチャしてる」
「すずかやなのは親友のアリサと・・・」

「まあまあアリサちゃん」
ひかるの双子の姉のなののである。

「どんだけ、ラブラブな小学3年生よ」
朝、なのはからひかるが予定よりもかなり早く家を出たと連絡があつてすずかの家に確認したらすずかももう家を出ていたのだ。何かあると思ひなのはにひかるの後を追ってもらつと二人で会っていたのだ。

「あはは」

アリサの言葉になのはただ苦笑するしかなかった。

「でねお姉ちゃんが……」

『そうなんだ。兄ちゃんも大変だな』
そんなことを知らない二人は楽しくお喋りしながらゆっくりみんなとの集合場所へ向かっていた。

しばらく歩いてそろそろ目的地に着くころにミィーナが念話で話しかけてきた。

(あの・・・ひかるさん、後ろになのはさんとアリサさんがいます)

(ほんとに!?!まさかずっと見られてた)

(恐らく、公園からなのはさんの魔力は感じていました)

(ライオンハートもなんで教えてくれなかったの)

(すみません、マスター)

(あの雰囲気じゃあ、声もかけられません)

(うっ／＼、じめん)

『すずか、後ろになのはとアリサがいる』

「えっ!？」 パツと後ろを見る。

電信柱の影からリボンでくくられた栗色の髪が見えていた。
頭隠して尻隠さずだな

「なのはちゃん！アリサちゃん！」
『いるんだろ』

「にやはは、見つかった」
「なのは、もっとちゃんと隠れなさいよ」

『まったく……』 「酷いよ2人とも!!」

僕が喋ろうとしたらすずかに遮られた。

「久しぶりにひかるくと2人つきりになれたのに」

目には涙を浮かべながら怒っていた。

「ごめんね、すずかちゃん」

「あ、あたしはすずかが心配で……ごめん」

『まあまあすずか、なのは達も謝ってるんだから。それに早く行かないと試合始まっちゃうよ』

「ひかる君は嫌じゃあないの？」

『確かにちよっと恥ずかしかったけど、それでもすずかと一緒にいられるほうがいい』

「ひかる君／＼」

「あゝもう！イチャイチャしない！」

「あはは／＼／」

河川敷のグラウンド

『ギリギリ間に合った』
グラウンドではもう両チームが整列していた。

「頑張つて！」

「みんな頑張れ！！」

アリサと機嫌を直したすずかが声を出す

ピッピ― ホイッスルが鳴って試合が始まった。

『頑張れ！』 俺も声を出して応援することにした。

しばらくして、カバンの中から見えていたミィーナが尋ねてくる

(これがサッカーというやつですか)

(そつ、11人1チームで基本は足だけでプレーして、手を使っていいのはゴールの前にいる1人だけなんだ)

(皆さん楽しそうです)

試合は前半を終了して0対0の好ゲーム

不意に父さんが僕たちのところに歩いてきた。

「すまない、ひかる。メンバーの1人がケガをして後半出れないんだ。代わりにまた出てくれないか？」

『 ええ、またあ 』

以前もケガとかで人数が足りなくなって助っ人で試合に出たことがあった。

「またってあんた、前もサッカーの試合出たことあんの？」
「どうなのよと言う風にアリサがこっちを見てくる。」

『うん、あれ言わなかったか』

「聞いてないわよ！ねえすずか！」

「ごめんアリサちゃん、私は知ってたよ」「私も」
「が二人は随分前から知っていたようだ。」

「また私だけ除け者……………」

あっいじけた

「すずかに目を合わせると」「ひかる君頑張ってる」
「笑顔で応援されたノノノ」

（ひかるさん、ファイトです）

（幸運を、マスター。）

（ありがとう、ミーナ、ライオンハート）

喫茶翠屋

試合が終わった僕達はそのまま四人で翠屋でお茶をしていた。

「すごかったねえ」

「ひかる君、かっこ良かったよ」

『ありがとう／＼／』

試合は後半始まってすぐにひかるがゴールを決めると終了間際にまた決め、2 - 0で勝利していた。

「あんた何やらしてもできるよね。この間の合同体育の時のバスケットだっ」

「あれもかっこ良かったなあ／＼／」

「苦手な物とかあるの？」

「あるよ、ひかるはねえ」

『な、なのは！／／／』

「朝が苦手なんだよ」

ひかるの制止も虚しくあっさりバラされた

「朝が！？」

「そつ、起きてすぐのひかるめちやくちや可愛いんだよ」

『／／／』

はっ恥ずかしい

「想像できない、寝ぼけているひかるなんて」

「ちよつと見てみたいかも」

（確かにあれは可愛いです）

（ミイーナ！） 彼女まで

「そんなレベルじゃあないよ、ひかるの場合は。この前だって……

……

『わ、わああああ』 身を乗り出してなのはの口を塞ぐ。

「じゃあ今度なのは家でお泊まり会決定ね」

「楽しみだね」

『そんな……トホホ……』

そうこうしている内に、店の中から翠屋JFCのメンバーがゾロゾロと出てきた。

それを見たアリサは立ち上がった。

「さて……私達もそろそろ解散？」

『だな』

「みんな午後から予定あるんだよね？」

「お姉ちゃんとお出かけ」

「パパとお買い物」

嬉しそうに2人は言った。

「いいな、月曜日にお話聞かしてね」

「おっ、みんなも解散か？」

店の中からエプロン姿の士郎が出てきた。

「ふえ、お父さん!？」

『うん、みんな用事があるからね』

「今日はお誘いいただきありがとうございます。」「

「試合かつこ良かったです」

アリサとすずかの二人が口々に士郎にお礼を言った。

「アリサちゃんもすずかちゃんもありがとうございます。あ、応援してくれて。帰るんなら送って行くけど」

「あっいえ、迎えがもう来きてますので」

「同じくですー」

すずかの後ろでアリサも手をあげて言う

「そっか、なのはとひかるはこれからどうするんだ?」

「家でのんびりする」

『僕も』

「じゃあ父さんシャワー浴びに帰るから、一緒に帰るか」

「うん」

「『じゃあさすが（ちゃん）、（アリスちゃん）また月曜日』」

「うん、またね」

「また明日」

2人は手を振りながら近くに来ていた車に乗り込んだ。

「またね」

『気をつけてね』

そんな2人を見て志郎が聞く

「2人ともまた背伸びたか？」

「お父さん、この前も同じこと聞いたよ」

『そんなすぐに伸びないよ』

「はは、そっかそっか」

2人の言葉を聞いて士郎は、苦笑した。

ひかるの部屋

『疲れたあー』

帰ってきて即ベッドにダイブ

「ひかるさん、またサッカー連れて行って下さいね」

カバンから出てきたミーナは、目をキラキラさせながら飛び回っていた。

『どう面白かった？』

「はい、ひかるさんもカッコ良かったです」

キイイイイイン！！！！

【マスター！！】

『ああ、僕も感じた』 ベッドから飛び起きる。 ドタバタ 階段を駆け降りる音が聞こえる

『なのは！？』

「なのはさんも気付いたみたいですね」
探知能力が低いひかる達は、どうしても後手に回りやすかった。

『早くしないと。僕たちも行くよ』

「【はい】」

市街地

いたるところから巨大な木が生え、根が伸びて街はめっちゃめっちゃになっっていた。

「なっ何これ!?!」

ひかるは街を見て唾然とした。ビルは壊れ、地面から巨大な木の根が生え出し、街にいた人達はパニックに陥っていた。

「恐らく、人間が発動したんだと思います。強い思いを持った人間が願いを込めて発動させた時、ジュエルシードが一番強い力を発揮するんです」

『すぐに何とかしないと。』

『ライオンハート頼むよ』

【stand by ready set up】

白いの光に包まれる。

光が消え現れた時、剣になったライオンハートと騎士甲冑になっていた。

『ミーナ、どうしたら封印できるの？』

「まずは、発動したポイントを割り出さないと。……でもこれだけ広いと」

見つける方法がなく戸惑っているとピンクの線が四方八方に伸びていった。

『なんだ、あれ！』

「広域探査魔法！？あの魔力光の色は」

『なのは、なのか』

そして、ピンクの光の帯は一カ所に集まっていく。次の瞬間、魔力砲撃が1つの根に直撃して回りの木が消えていった。

『凄い・・・、あれをなのはが』

いつしか辺りは夕焼けに染まり、残ったのは荒れ果てた街並みだけだった。

【mode release】

ライオンハートを待機状態に戻す。

「ありがとう、ライオンハート」

僕には使えない、遠距離砲撃魔法。なのはよりも先にジュエルシードを見つける方法を考えないと

「いろんな人に迷惑かけちゃったな」

街のいたるところから救急車や消防車のサイレントが聞こえてくる。

帰り道

とぼとぼ歩いているのはを見つけた。

『なのは、どうしたの？こんな所にいたら危ないよ』

「あっ、ひかる」

声をかけて振り向いたなのは見るからに元気がなくて落ち込んでいた。

「あ、」

さっきので怪我をしたのか体を支えてもらいながら歩いている人がいた。

『……………帰るっ』

「……………うん」

僕は、何も言わずなのはの手を握って家へ帰っていった。

無印第4話『ライバル!?もうひとりの魔法少女なの』

第4話「ライバル!?もうひとりの魔法少女なの」

高町家

ひかるの部屋

「なのは、ひかる、まだかあ?」

下から兄さんの声が聞こえる。

『すぐ行く!』

今日は、すずかがお茶に誘ってくれたので1日月村家で過ごす予定だ。

ライオンハートを首からかけ

『ミイーナはどうする?またカバンに入ってる?』

「いえ、今日は別の方法を使ってみます」

『別の方法?』

「まあ見てて下さい」
と言つとミィーナの足下に魔法陣が展開された。

「マジックカーテン」
ミィーナの体の回りが薄く光だした。

「この魔法は、ひかるさん以外見えなくなる魔法です」

『本当に!?!?』

「はい 心配いらないですよ」
そう言つてミィーナはひかるの肩の上に座つた。

「ひかる、まだか?」

『今行く』

高町家リビング

『お待たせ』
僕がリビングに行くつとすでになのはと兄さんが準備を終えて待つていた。

「バスの時間ギリギリだぞ」

「ひかる、遅い」

『じゅめん』

リビングにいる誰もミイーナに気付いていないみたいだ。

(ほんとに見えてないんだね)「じゃあ、行くぞ」

「『うん』」

「『』」行ってきました「『』」

「行ってらっしゃい」

美由紀姉に見送られて僕たちは家を出た。

月村家

ピンポーン

インターホン押すと中からメイドのお姉さんが出てきた。

「恭也さま、なのはお嬢さま、ひかるさま、いらっしゃいませ」

「ああ、お招きに預かったよ」

『「ごんにちは」』

この人は、月村家メイド長のノエルさん 無口な人だけど美人で

かっこいいんだ

「どつぞ、こちらです」

ノエルさんに案内されながら屋敷に入った。

テラス

「失礼します」

入ってみるとそこには、たくさんの子猫と、すずか、アリサ、忍さん、メイドさんがいた。

「あつ、なのはちゃん、ひかるくん、恭也さん」

『「すずか(ちゃん)」』

「キユ」

「なのはちゃん、ひかる君いらっしやい」

この人は、すずかちゃんの専属メイドのファリンさん。明るくて優しいお姉さん。

「恭也、いらっしやい」

「ああ」

兄さんと忍さんは、高校の頃からのクラスメイトさんで、今ではす

ついでに仲良しさんだ。

「お茶をご用意しましょう。何がよろしいですか？」

「任せるよ」

「なのはお嬢様、ひかる様は？」

「私もお任せします」

『僕も』

「かしこまりました。……ファリン」

「了解です。お姉さま」

ファリンは、返事をしてノエルに歩み寄る。

「じゃあ、私と恭也は部屋にいるから」

「はい、そちらにお持ちします。」

ノエルとファリンは一礼をして出て行った。

「おはよう」

「うん、おはよう」

『おはよう』

挨拶を軽く交わして僕らは用意されていた席につく。そうしたらア
リサが声をかけてきた。

「それにしても、なのはのお兄ちゃんとすずかのお姉ちゃんラブラ
ブだね」

「うん お姉ちゃん、恭也さんと知り合ってから凄く幸せそう」

現に二人は、部屋を出ていく時に見つめあつた腕を組んでいた。

「ウチのお兄ちゃんはどうか」

『昔に比べて少し優しくなったかな』

「それとよく笑うようになったかも」

「そっか」

「そういえば、今日は誘ってくれてありがとうね」

「ううん、こっちこそ、着てくれてありがとう」

「今日は……元気そうね」

「えっ!?!」

「なのはちゃん、最近元気なかつたから。もし何か心配事があるな

ら話してくれないかなって、2人で話してたんだけど」

流石、親友なだけあって、なのはのちょっとした変化に気がついて
いるよね。

「すずかちゃん、アリサちゃん」

と感慨な雰囲気になっていると

「きゅ〜っ！〜！〜！〜！」

「『『』 えっ！』『』」

ユーノの悲鳴が部屋に響いた。

「キュフ、キュフ、キュフ」

ユーノの声にびっくりするなのは

見るとユーノが子猫に追いかけてられていた。

「ユーノ君!？」

「アイ!ダメだよ」

と立ち上がる二人

そこに

「はい、お待たせしました。イチゴミルクティーとクリームチーズクッキーです」

現れた、ファリンの足下を走り回る二匹。

「あ、ああ、わああ、あゝあゝ」

それにびっくりしてバランスを崩して、目を回しながら倒れそうになる

「ファリン、危ない!!」

「ふああ!!」

とっさにすずかとなのはの2人が駆け寄り、倒れないように支える。が、紅茶のポットは床に落ちなかったけどクッキーはお皿から零れて床に散乱してしまった。

「……………はっ、ふあああ!!なのはちゃん、すずかちゃんごめんなさい!!」

ファリンの謝る声が屋敷中に響いた。

庭園

「しっかし、すずかの家って猫天国よね」

気を取り直して、ひかる達はテラスに出ていた。お茶をしているテ

ーブルの回りには沢山の猫、子猫がじゃれていた。

「子猫たち可愛いよね」

なのはが一匹の子猫を抱き上げる。

「うん 里親が決まっている子もいるからお別れもしないといけないけど」

『そっか、それは寂しいね』

「でも、子猫たちが大きくなっていくのは嬉しいよ」

「そうだね」

(ひかるさん、子猫を触ってみていいですか)

(ちょっと待ってね)

『アイ、おいで』

テーブルのしたにいた先ほどユーノを追い回していた子猫を呼び抱き上げる。

(ほら、こつやって頭をなでてやって)

「にゃ〜」

僕がなでてやると気持ち良さそうな声を上げた。

(はい)

僕と同じように猫をなでた。

「にゃ？」

なでられた子猫は不思議そうに辺りをキョロキョロしていた。

『ふふ』

「アイ、ひかるに抱っこされるのが本当に好きだね」

そう言われて、僕に抱っこされて嬉しそうにしているアイを見る。

「にゃあ〜」

『そういえば、アイはいつも僕の側に来るよね。』

膝の上で丸くなったアイの頭をまた撫でてあげる。

「にゃ！」

暫く、四人で雑談していると、膝に乗せていたアイが、突然何かを見つけたのか森の方に走って行ってしまった。

キ
ン

『！』

(すぐ近くです)

(どうしよう、方向的にアイが走っていったほうだ)

「 あっ、ユーノ君! ? 」

ユーノが森の中に消えて行くのが見えた。

(やるな、あのしゃべるフェレット)

ひかるは、ユーノがとった行動の意図を瞬時に理解した。

「 あらら、ユーノ、どうしたの? 」

「 うん、何か見つけたみたい 」

ユーノを追いかけようと立ち上がる。

「 ちょっと探してくるね 」

「 一緒に行こうか? 」

「 大丈夫、すぐ戻って来るから待ってて 」

心配するすずかにそう言うとなのはは森の方に走って行った。

(心配だからミィーナも一緒に行ってあげて、僕もすぐに行くか)

(わかりました。)

そう言うミィーナも跡を追って森に入った。

森

茂みの中が激しく光出す。

「あつ」

「発動した！」

「ここじゃ人目が………結界を作らなきゃ」

「結界!？」

「最初に会った時と同じ空間、魔法効果の生じている空間と通常空間との時間進行をズラすの、僕が少しは得意な魔法」

ユーノの足下に緑色の魔法が浮かび上がった。

「あまり広い範囲を切り取れないけど、この屋敷の付近くらいは……なんとか」

そして、そこを中心に半径1キロほどの巨大なドームが出来上がった。

ジュエルシードの光は周りの木と同じくらいの高く大きくなり回りの木をなぎ倒した。

「にゃくん」

「ふえ!？」

「おっ………」

光が晴れると、そこには大きくなった子猫がいた。高さは3メートル

ル以上はあるかもしれない

「にゃ〜」

「あ、ああれは……………」

「たぶん、あの猫の大きくなりたいて願いが正しく叶えられたんじゃないかと」

「そ、そつか……………」

なんだか2人とも呆れていた。「とにかく、あのままじゃあ危険だから元に戻さない」と」

「そうだね、流石にあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃうだろうし、あの猫ひかるになついていた子だしね」

「にゃ〜ん」

地響きを立て辺りをうるつく子猫

「襲ってくる様子はなさそうだし、ささっと封印を……………」

懐からレイジングハートを取り出す。

「じゃあ、レイジングハート!!」

黄色閃光がなのの上を通過し、子猫に直撃した。

「あ!?!」

飛んできた方を見ると、少し離れた所の木の上に金髪に黒のマントの女の子がいた。

「バルディッシュ、フォトンランサー、電撃」

【Photon lancer full auto fire】

ドドドドド

何本もの砲撃が続けて命中する

「なっ……魔法の光……そんな……」

「レイジングハートお願い」

【stand by ready set up】

レイジングハートを起動して、猫と女の子の間に割り込む。

しかし、新たな砲撃がすでに迫っていた。

【wide area protection】

なんとか全弾防ぐことができた。

「魔導士!?!」

しかし、次の攻撃で黒のマントの女の子は、攻撃範囲を足下まで広げたので防ぐことができない。

「にゃ〜お〜」

猫がバランスを崩し転倒する

なのはは猫を庇うように女の子の前に立った。

（そろそろ驚かなくなっただけ、僕がなのはに教えることはもう何もないかも）

「同系の魔導士……ロストロギアの探索者か」

（っ！？間違いない、僕と同じ世界の住人。そしてこの子ジュエルシードの正体を……）

「バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス」

なのはのレイジングハートを見ていた

「バル…ディッシュ?」

「ロストロギア……ジュエルシード」

【Scythe form・Set up】

バルディッシュから黄色光が出てきて鎌のようになる。

「申し訳ないけどいただいていきます」

そついうと女の子は、襲いかかってきた。

「えっ」

【Evasion Fictifin】

飛び上がり空中へと逃げる。

【Arc saver】

光の鎌が回転しながら向かってくる。

【Protection】

なんとか受け止め更に上昇しようとした。しかし、なのはの更に上から女の子はバルディッシュを振りかぶり接近してきた。

「くっ」

それをとっさにレイジングハートで受け止める。

「いきなり…なんで！」

「答えても、たぶん意味がない」

女の子は一旦なのはと距離をとった

【Device mode】

光の鎌が消え元の形状に戻る。

【shooting mode】

それを見てレイジングハートも砲撃用に形をかえる。

【Divine Buster・stand by】

【Photon lancer・Get set】

お互いに砲撃魔法を起動してデバイスを構える。

(きつと私と同じ年くらい。綺麗な髪と綺麗な瞳、だけど、この子…)

「じゃ〜」

気が付いた猫に一瞬気を取られる。

「……………ごめんね」

【Fire】

その隙をつき、女の子がさっきまでとは比べものにならない大きな砲撃を放った。

ドッバン!!!!!!

「きゃっ……………」

「なのは!!!!!!」

なのはは直撃を受け吹き飛ばされる。

「くっ間に合わない!!」

落下するのはをユーノは追いかけるが追いつきそうにない。

【Flush Move】

「えっ!?!」

落下していたなのはが突然消えたのだ。

『良かった、間に合った。』

そして、近くなのはを抱きかかえたひかるが現れた。

『ミイーナ、なのはを頼む』

「はい」

ユニゾン解除してなのはをその場に下ろした。

「君は……ひかる君？」

『話は後だ』

そう言うとひかるは飛び上がり、ジュエルシードを封印した女の子に向かう。

『おい！待て！』

「！？（まだ他にいたの）」

『なのはにあんなことして無事に帰れると思うなよ』
ライオンハートの切っ先を女の子に向けた。

「知らない、邪魔するならあなたも……」

とバルディッシュを構えるが

「えっ!?!」

一瞬彼が光ったと思うと目の前から消えていた。

ゾクッ

『僕をどうするって』

ひかるは背後から女の子の首にライオンハートを突きつけていた。

(まさかあの一瞬で背後をとられた!?)

圧倒的な実力差に恐怖と戦慄を覚える。

なんとかしようと思いを込めるが

『おっと動くなよ!僕は今気が立ってるんだ。下手をすると怪我ですまなくなってしまうかもしれない』

「くっ……」

(気を付けてください、ひかるさん。何か近づいてきています)

「フェイト!!!」

突然巨大な狼が飛びかかってきた。

『はっ!…くっ』

とつさに防壁を展開して受け止めたが女の子は拘束から逃れてしまった。

「撤退するよ、フェイト!」

「うん」

『逃がすかよ！、ライオンハート！』

ラ「All right. Cartridge lord」

ガシャン、ガシャン、ガシャン

と3発の薬莖が弾き出される。

『貫け！』

【シャイニングバスター】

ひかるの右手に集まった光が砲撃となってフェイトと狼に直進する。

ド
ン！！！！！！！！

黒煙が辺りを包み込んだ。

『……………逃げたか』

【はい、目標の反応喪失しました】

煙が晴れると、そこには誰もいなかった。

プス　とライオンハートから大量の煙が吐き出される。

(ミイーナ！なのはは大丈夫か)

(はい、気絶しているだけです)

『良かった……』

なのはのそばに着地するとライオンハートを待機状態にした。

「あの君たちはいい……」

『今はそんなことはどうでもいい、それよりもすぐか達を呼んで来てくれるか？』

「あつ、うん」

ユーノは屋敷の方に向かっていった。

その後駆けつけた、すぐか達と一緒になのはを屋敷まで運び込んだ。

そしてなのはが目覚めたのは、日も暮れかけた夕方だった。

無印第5話『ここは湯の町、海鳴温泉なの』

第5話「ここは湯の町、海鳴温泉なの」

さて、日本国内は全国的に連休真っ最中です。なので、お店を店員さん達に任せて、ちよっとした家族旅行に出かけたりします。

今回は、僕たち、高町家一同と忍さんにずずか、ノエルさんにフアリンさんの月村家と、あとアリ、サモ一緒です。

車内

旅館に向けての車内

「あれれ、ひかる寝ちゃったよ」

「ほんとだあ」

『ZZZZZ...』

ずずかの隣で窓に寄りかかって爆睡中のひかる。最近、あの黒いマントの女の子が現れてから、剣の稽古も、魔法の練習も倍にしていた。

「最近、なんだかよく眠たそうにしてたから、疲れてたかも」

「ひかる、最近稽古も力入ってたし、今は寝かしといてあげて」

「……は〜い」「」

美由紀の言葉を聞いてひかるを寝かしておくことにしたのだった。

車が山道に差し掛かったとき、ガタツン!!! っと車が揺れた弾みで窓に寄りかかっていた僕の体がすずかの方へと倒れた。

「っ…… / / / / / /」

一瞬びつくりしたすずかだったけど肩に乗せられたひかるの寝顔を見て頬を赤く染める。

(本当によく寝てる)
頬を軽くつついてみる。

『う…… Z Z Z Z』

(かわいい / / / / /)
ひかるの撫ったそうにした仕草を見て更に赤くなった。

(気のせいかな、空気が変わったよね)

(あはは、2人とも相変わらずだよね)
ピンクのオーラ全開のひかる達になのはとアリサは苦笑するしかなかった。

「ねえ、早速温泉入ろうよ」

「うん」

「ひかる君はどうしよう。起こしたほうがいいかな？」

旅館に着いた時にも起きず、士郎に抱っこされて 部屋で寝ていた。

「とりあえず、声はかけておいたら」

「ひかる、ひかるってば
軽く体を揺する

『ZZZZZ・・・ZZZZZ・・・』

「ひかる！いい加減に起きてー！
今度は強く揺すってみる。」

『うつ・・・うつん・・・なの？』
目をこすりながら体を起こす。

「ひかる君、私たち、温泉入ってくるから」

「あんたはどうするの？」

『……………い……………く……………』

布団を出てフラフラと立ち上がる。

「じゃあ、ひかるこっち来て」

なのははまだ半分寝ているひかるの手をひいて洗面所に連れて行った。

温泉に入り、浴衣に着替えた4人は旅館の中を探検していた。

湯上がりの3人はいつも以上に可愛く見え、特にすずかは直視できなかった。

「ねえ、次どこ行こっか」

「お土産見てみたいかも」

「いいわね、2人はそれでいい」

「『うん』」

それで僕らは売店を探しに行こうとした。

「は〜い、おチビちゃん達」

すると赤い髪の外人さんが声をかけてきた。

僕は、意識的にすずかの手をひいて僕の後ろに隠した。

「君かね、うちの子をあねしてくれてるのは」そうやってなのは前に顔を持って来る

「え……」

「あんま、賢そうでも強そうでもないし……ただのガキンチョに見えるんだけど……」

明らかになのはが困っているようなので割って入ろうとしたら、

アリサに先越されてしまった。

「……っ！…！なのは、お知り合い？」

「うん」

「この子、あなたを知らないそうですがど ちら様ですか！」

「あははは、いや〜ごめんね。知り合いの子に よく似てたもんだからな」

「あ、いえ……」

(今日は挨拶だけにしておくけど、今度邪魔し たら容赦しないからな)

「「っ…！？」」

(君はいつたい)

「(忠告したよ)じゃあねえ」

彼女が見えなくなっからアリサがキレた。

「なんなのよ！あのおばさん！」

「まあまあアリサちゃん」

『なのは大丈夫？』

「うん」

『ならいいけど（ユーノ、何があったのか？）』

（えっと、今の人あの子の関係者みたいなんだ）

（ホントに!?!）『さっきの所に忘れ物したみたいだからみんな先
に行ってて』

そう言つとひかるは来た道を引き返しだした。

「あっひかる君!?!」

『すぐに追いつくから』

あの人はまだそう遠くに行っていないはずだ

最初の角を曲がった先、浴場の前に彼女はいた。

『あ〜』

「うん……君はさっきのガキンチョの1人じゃあ　ないか。まだな
んか用かい?」

『べつに用ってほどじゃあないんですけど（さっ　きは忠告をどう
も）』

「　っ……!?!?（もしかして、お前はあの時の!?!）」

(僕からも君たちに忠告しておくけど、なのはに 怪我させてみる、ただじゃあ済まないぞ)

子供の物とは思えない殺気を受け一瞬身を引いて しまう。

まずいよ、今のフェイトじゃあこの子には勝て ない。あたしが なんとかしないと

しばし沈黙が流れる

「あれひかるじゃあない、どうしたのこんな所 で」
浴衣姿の忍と美由紀が女湯から出てきた。

「あれ、なのは達と一緒にじゃあなかった の？」

『なのは達なら、今売店でお土産を選んでもよ。 ……あ、…え
と、今のでわかりましたか？』

「あ、ああ助かったよ」 そう言うと女性は早足でこの場を去って いった。

「？」

忍さんが逃げるように行ってしまった女性を不思議に見ていた。

「コラ！ひかる、知らない人にあんな殺気 向けちゃ駄目だよ！」

『ごめんなさい、外人さんについビックリし ちゃって』

「まったく、今回はお父さんには黙ってて あげるからもうしたら

駄目だよ」

『はい』

夜

なのは達が寝静まった頃をみて、ひかるは部屋を 抜け出して、近くの森に来ていた。

『ミーナ、反応があったのがこの辺り？』

「はい、ちょうどその茂みの向こう辺り からジュエルシードの反応があります。」

『おっ、あった。アレだな』

茂みの先にあつた小川の辺にジュエルシードが小 さく光っていた。

「良かった、まだ発動していないみたい ですね」

『じゃあサツサと封印しますが、ライオンハート』

【All right . Stand by ready . Set up】

騎士甲冑を装備してライオンハートをジュエル シードにかざす。

『封印！』

ジュエルシールドがライオンハートの中に入った。

【Receipt】

「ひかるさん！後ろから何か来ます！」
とミーナが注意を促してくる。

『（たぶん、あの子だろ）ミーナ、ユニゾンで 迎え討つよ』

「はい！、ユニゾン・イン！」
ひかるの甲冑と髪の色が変わる。

そして予想通り姿を見せたのは、黒いマントの少女フェイトと昼間の女の人だった。

「先越された。」

アルフ「あいつ！」
僕を見るなり襲ってきた。

障壁を展開して拳を受け止める。

『やっぱり、近くにいたか。残念だけど今回は諦めてもらうよ』

左手のライオンハートに魔力を込める。

「アルフ離れて！」
ライオンハートを振るが空振りに終わる。

「助かったよ。フェイト」

「アルフは下がって、私がやる」

【Scythe form・Set up】
今度はフェイトが向かってくる。

【Scythe slash】
「はあああ！」

次は受け止めずに飛び上がってかわす。

【Photon lancer】

「ファイヤー！」

5つの魔力弾がこっちに飛んでくる。

「突き抜ける！」

【All right】
カートリッジを一発消費して魔力を急激に高め、魔力弾に突っ込んで行く。

『でやああー！』
魔力弾を斬り去りフェイトに接近する。

「っ……！」
とっさにバルディッシュでひかるの剣戟を受け止めが弾き飛ばされる。

(強い、やっぱり今の私じゃあまだ勝てない)
なんとか空中で立て直す。

「!?!」

『貫け!』

【Shining buster】

(速い!)

フェイトが空中で体勢を立て直している間にチャージが完了していたのだ。

轟音をたてながらひかるの砲撃がフェイトを襲う。

「っ……………」

目を瞑り衝撃に耐えようとして歯を食いしばる。

「えっ……………」

しかし、いつまで経っても衝撃は来なかった。

砲撃はフェイトに直撃せず、大きく右に逸れていた。

「やっほっほ……………」

フェイトはひかるの方を見ると、ひかるは森の中を見ていた。そこにはバリアジャケットを装備したなのはがいた。

「あなたは、あの時の!？」

『ヤバい(ミイーナ帰るぞ)』 (了解です)

どこかアタフタした様子でひかるはその場を離れた。

目の前の状況にポカンとするフェイト

「あつ、ちよつと!.....行っちゃった」

なのははフェイトに気付いて向き直る。

「あの.....名前、貴方の名前は」

「フェイト・テストロッサ.....君は私達の前には現れないほうがいい。今度は前みたいに手加減しないから」

「私は、.....」

なのはの返事も聞かずフェイトもどこかに行ってしまった。

無印第6話『わかりあえない気持ちなの』

第6話「わかりあえない気持ちなの」

なのはsaid

朝

洗面所

起きてきたなのは洗面台の鏡と向かい合っていた。

ずっと考えてた

きっと私と同年くらいで深くて綺麗な目をしたあの子のこと

会えば、きっとぶつかり合うことになるけど

だけど私はあの子と……

学校

ダンツ！！！！ アリサが机を叩いた音に周りにいたクラスメートがみんなこちらを向く。

「いい加減にしなさいよー」

「っ…!?!」

そんなこと気にも止めずに続ける。

「この前からずっと何話してても上の空で」

「い、ごめん」

「ごめんじゃあない！私達との話がそんなに退屈ならずっとそっしてなさい！…行こう、すずか」

そのまま、アリサは教室から出て行った。

「アリサちゃん！…あっ…なのはちゃん」

「いいよ、今はなのはが悪いから」

「そんなことないと思うけど、とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ…少し話してくるね」

すずかもアリサの後を追って教室から出て行った。

「ごめんね」

(はあ……………なんでこうなっちゃうんだろ…)
なのはの背中はどこか寂しそうだった。

なのは said end

『うん？』

さっき、怒った様子のアリサが通り過ぎたと思ったら、次はすずかか……

『何かあったのかな（それになのはがないなあ）』

気になったので僕は2人を追いかける事にした。

追いついてみると2人は、階段で何か話していた。

「なんで怒ってるのか、なんとなく分かるけど。……ダメだよ、あまり怒っちゃ」

「だってムカつくわ、悩んでるの見え見えじゃない。迷ってるの、困ってるの見え見えじゃない！なのに、何度聞いても私達には教えてくれない」

『……………』

なんとなく出ずらい雰囲気なのでこのまま階段の影に隠れていることにした。

「悩んでも迷ってもないって嘘じゃん！」

「どんなに仲良しの友達でも言えないことはあるよ。なのはちゃん
が秘密にしたいことだったら私達は待っててあげるしかできない
んじゃないかな」

『……………（やっぱり、なのはが原因か…）』

「それがムカつくの、少しは役に立って上げたいのよ。どんなことだっていいから、何にもできないかもしれないけど、少なくとも一緒に悩んであげられるじゃあない」

『……………なんだかんだ言ってアリサもなのはが好きなんだな』

これ以上立ち聞きはよくないと思いひかるはその場からそっと立ち去った。

夕方

喫茶翠屋

今日は翠屋のお手伝いをする日だったので学校が終わってからすぐに翠屋に来ていた。

『兄さん、これお願い』

僕がお皿を下げてきた皿を兄さんの所に持っていく。

「わかった、そこにおいておいてくれ」

『はい』

フロアに戻ろうとしたら忍さんに呼び止められた。

「ねえ、恭也、ひかる、ちょっといい？」

「ああ」

『なんですか』

「……なのはちゃんのことなんだけどさ、最近何か悩みでもあるのかな。私が見てても思うし、さすが結構気にしてるの」

「ああ、最近、夕方や夜の外出も多いしな」

「お節介かもしれないけどさ、ちょっとお話聞いてあげてもいいかな？」

「それはありがたいことだけど」

『たぶん、なのはは何も話さないとします』

「……あたしじゃあ駄目かな」

『ああ！？違います。忍さんにじゃあなくて。たぶん誰にも話さないと思います。』

「アレは、昔から自分に悩みや迷いがある時はいつもそうだったから」

『……そうなんだ』 『そのうち、自分でちゃんと答えを見つけますよ。』

恭也「でもほんとに辛そうなら声をかけてやってくれ」

忍「うん……わかった」

なのは said

夜

「うんタイムアウトかも」

携帯を取り出して時間を確認する。時計は、すでに8時を過ぎていた。

最近、学校が終わってから時間があればずっとジュエルシード探しをしているけどまだ1つも見つけれなかった。

「大丈夫、僕が残って探しておくよ」

「わかった、ユーノ君の分ちゃんとしておくね」

そうして、ユーノと別れようとしたら、近くのビルからオレンジ色の光の柱が登った。

「まさか！？、魔力流を打ち込んで強制発動させるなんて」

「……広域結界・・・間に合え！」
魔法陣を展開して、周囲に結界を構築する。なのはは、すぐにレイジングハートを起動させる。

「レイジングハート！お願い！」

【Stand by ready・set up】

なのははバリアジャケットを装備して発動したジュエルシードに向かう。

（なのは、あの子達よりも先に封印を！）

（うん、…………… あっ！？）

発動したジュエルシードを挟んで向かいのビルの屋上にあの子がいた。

「リリカル・マジカル」

「…ジュエルシード、シリアル??」

「「封印！」」

2色の砲撃が轟音を起てながらジュエルシードを直撃した。2人の砲撃によって発動したジュエルシードは一瞬にして封印された。

「……………」
「……………」

2人はジュエルシードを挟んで向かい合った。

「この間は、自己紹介できなかつたから……………。私、なのは。高町なのは、私立聖翔大付属小学校3年生」

しかし、フェイトはなのはの訴えにはまったく反応はなく。

「……バルディッシュ、フォトン・ランサー」

「っ……アクセル」

「「シュート（ファイヤー！）」」

2人の3度目の出会いは、戦いとなった。

なのは said end

ひかる side

ジュエルシードからかなり離れた場所にあるビルの上からなのはの戦いを見守っていた。

「ひかるさん！大変です！」

『どうかした？』

「さっきあのロスト・ロギアの魔力値をライオンハートのデータと比較してみたら、あそこにあるジュエルシードはもう臨界状態にあります！あと一撃でも加えられると爆発します！」

『まじー！？』

【はこ】

「早くあの2人を止めてください！」

『わ、わかった……………（ユーノ、おいユーノ！）』
なのはの近くにいたるるユーノに念話を飛ばす。

（えっ！、ひかる？どうしたの？）（すぐに戦闘を止めるんだ！
でないとジュエルシールドが！）

（えっ……………どういうこと？）

（とにかく止めるんだ！）

（わかった、やってみる）

しかし、ひかるは急いでジュエルシールドのもとに向かうと2人の戦
闘はまだ続いていた。

更に、2人はジュエルシールド目掛けて突進していた。

『ダメだあああ……！』

しかし、時既に遅く 2人はお互いのデバイスをジュエルシールドに
重なり合う。

ピキピキ

「えっ……………」

なのは「うん、大丈夫……………あの、助けてくれてありがとうございます。」

『話はあと。ユーノ、なの・この子のデバイスは治るのか』

「うん、すぐには無理、今は自動修復機能をフル稼働させてるから2、3日はかかる」

『その間、少し反省するんだな。この子にどれだけ無理をさせたかを』

「ごめんね、レイジングハート……………」

本体の赤い宝石の部分に亀裂が入りしきりに点滅していた。

無印第7話『四人目の魔法使いなの』

第7話「四人目の魔法使いなの」

時空管理局 次元航行船アースラ

会議室

「先日、観測された次元震以降、現地では目立った戦闘はないようです」

「……次」

「ロスト・ロギアの探索者は少なくとも2組以上いると考えられます。次元震以前より何度も戦闘を繰り返しているようです」

「わかりました。アースラはこれより現地に急行しロスト・ロギアの封印、探索者から事情聴取を行います」

「「「はい」」」

「期待していますよ。クロノ執務官」

「任して下さい」

高町家

なのは said

なのはの部屋

勉強机の上には、小さなハンカチの上で赤い宝石がしきりに点滅を繰り返していた。

(レイジングハートがここまで損傷するほどの魔力爆発……もしかしたら次元震を引き起こしてしまったのかもしれない)
トントン ドアをノックする音が聞こえるとお菓子をトレイに乗せ

たなのはが入ってきた。

「ユーノ君、レイジングハート大丈夫？」

「かなり破損が大きいけど、きっと大丈夫。今自動修復機能をフル稼働させてるから明日には治るよ」

「ごめんね、レイジングハート……」

クッキーを机に置き、ベッドに腰かける。

「ねえ、ユーノ君。あの時私を助けてくれた人、どこかひかるに似てなかった？」

「?!?、そ、そうかな。僕には別人に見えたけど。」

「やっぱり気のせいなのかな」

なのは said end

『うつくん、すずか?』

すずかの顔が僕の目の前にある。それに後頭部に心地良い感覚が…

…
/
/
/

「おはよう、ひかる君」

『あれ？僕どのくらい寝てた？』

前回のジュエルシードの暴走からもう一週間、今日は久々にずか
とデート。お昼頃に海鳴公園で芝生にシートを広げてお弁当を食べ
て 2人でゆっくり休憩していたら気付いたら寝てしまっていた。

「うん、もぐぐっすり。2時間くらいかな」

『ごめん』

起きようとしたらダメっとすずかに頭を抑えられ再度ずかの膝の
上に戻された。

「ひかる君、最近疲れてるみたいだからこんな時くらいゆっくり休
んで」

『ありがとう／＼』

確かに最近疲れ気味だったのでここは素直にすずかの言うとおり
休ませてもらうことにした。頭を撫でてくれるすずかの手が心地良
く また眠りかけた時それは起きた。

ドックン！！！

『！！！』

そして2人の近くにあった大木が雄叫びを上げながら動き出した。

『なんでこんな時に！』

僕は飛び起きると突然のことで固まっているすずかの手を取ってと全力でその場を離れる。

112

「きゃあ！？」

飛び出していた木の根に詰まらずいてすずかが転けてしまった。

『すずか！！！』

「大丈夫、っ・・・」

すぐに起き上がるがさっきので足首を痛めてたのか赤く腫れている。

「ひかる君は、先に」
行ってと言おうとしたら、それよりも早くひかるがすずかを抱っこして走り出した。所謂、お姫様抱っこで。

『すずかはここで待ってて』
公園からかなり離れた場所まですずかを連れていくと元いた場所に
戻ろうとした。

「ひかる君！だめだよ」

『大丈夫、様子を見に行くだけだから。じつとしてね』
そう言つと着た道に戻った。

広場に戻ってみると化け物と化した大木となのはとフェイトが戦っていた。しかし、2人が協力して戦ってるにも関わらず苦戦しているのを見ると今まで敵とは訳が違つ。

『いぐぞ！ミイーナ、ライオンハート』

【all right, stand by ready, set up】

「『ユニゾン・イン!』」

騎士甲冑をつけミィーナとユニゾンすると化物の背後に回る。

(まだ気づかれてません)

『この隙をつく!』

足を前後に開き左手を突き出す。

『シャイニング』

【バスター】

なのはとフェイトに気をとられている隙を突いて背後からシャイニングバスターをおみまいする。

ギヤシャアア! 不意打ちの一撃だったがさほどダメージを受けた訳ではなくこちらに向き直すと怒り狂って触手のような根を伸ばす。それをひかるは、切り刻みバラバラにする。

『硬いな...(ユーノ!僕があいつの態勢を崩すからなのはのデイバインバスターで止めを)』

(わかった！)

『やれるか、ライオンハート？』

【愚問ですよ、マスター】

『よし！いい返事だ。』

ライオンハートの言葉を聞きカートリッジを3発消費して剣身に魔力を集中させる。

【flash move】

『閃光激烈・・・ラフデイド！！！！』

フラッシュムーブで懐に潜り込んでライオンハートに纏わせた魔力で大木のバリアを突き破り右半身を切り裂いく。

「デイドイン……バスター！！」

そしてすぐ、なのはのピンクの砲撃が炸裂し大木は蒸発しジュエルシールドだけが残った。

封印したのはいいけど、問題は誰がこれを取るかだよなと考えているとすでになのはとフェイトが戦闘を始めようとしていた。

「それまでだ!」

突然二人の間に現れると振り下ろされるデバイスを受け止めた。

「時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ。これ以上の戦闘は認めない」

「!?!」

「(マズい、とうとう管理局に嗅ぎつけられた)」

「事情を聞かしてもらおうか」
そう言うとクロノは2人を地上に下ろした。

「それとその君も……………っ!!」
クロノはとっさにシールドを展開する。次の瞬間、オレンジ色の弾丸をシールドに衝突した。

「フェイト、撤退するよ」

『なんだか知らないけど、フェイトを援護するぞ』

(ええ!?!、止めておいた方が)

『ミイーナ、僕はフェイトを助けたいんだ』

「はあ……………、後でどうなっても知りませんよ」

『よし、行くぞ』

クロノと名乗った少年がフェイトに向けて魔法を放とうとしている所に横から無理やり割り込んだ。

「なんだ君は」

「3人目の魔導士！？そんなの報告になかったぞ。」

『ライオンハート！』

【All right・cartridge lord・
一発のカートリッジを消費して、剣身の魔力を高める。】

「っ……………」

S2Uを構え臨戦態勢をとる。

なんだ、あの魔法は……………」

(何も言わず、僕の合図で離脱するんだ)

魔力を高める合間にアルフに念話を送る。

(なにを!?)

(行け!!!)

『フェイテッドサークル!!!』

「なっ!?!」

巨大なエネルギーの衝撃波がクロノを襲う。

「すまない」

アルフはフェイトを乗せたまま空間転移を繰り返しながら離脱した。

『僕らも逃げるぞ!』 ひかるもその場から離れていった。

ひかるの攻撃をなんとか防いだクロノだったが、すでにひかる達が逃げたあとだった。

「すみません、艦長。逃げられてしまいました。」

「うんま、大丈夫よ。でちょっと話を聞きたいからそっち子たちをアースラに連れてきてちょうだい。」

「了解です。すぐに戻ります」

通信を閉じて、なのはの方を見る。

「すまないが、一緒に来てもらおうよ」

「わかりました」

女の子の代わりに、肩に乗っているフェレットが答えた。

使い魔なのか、……違うな変身しているのか 考えるのを中断して、アースラへの転移魔法陣を開く。

第8話「それは大いなる危機なの」

第8話「それは大いなる危機なの」

時空管理局艦船アースラ

「戦闘行動は終了。搜索者の一方は逃走
戦闘を終えたクロノが、モニターに映っていた。

「追跡は」

「少女の方は多重転移で逃走してます。追いきれませんね」

「少年の方は、完全に魔力サーチャーから消えました。いったいどんな手を使ったのか」

「そう。まあ、戦闘行動は迅速に停止。ロストログアの確保も終了。」

よしとしましょう。事情もいろいろ聞けそうだしね」「
リンディは、パネルを操作してクロノに通信を繋ぐ。

「すみません、艦長。片方には逃がしてしまいました」

「うんま、大丈夫よ。でちょっと話を聞きたいからそっち子たち
をアースラに連れてきてちょうだい。」

「了解です。すぐに戻ります」

一方、その頃。

管理局のサーチャーから逃れたひかるは、すずかの下へ急いでいた。

『どのくらいだった？』

【46分34秒です。】

『急がないと!!!』

必死に走ってすずかを待たせた場所へと向かっていた。

『怒ってるかな』

(たぶん、怒っていると思います。)

【謝るしかないですよマスター】

『だよね』

その後、すずかに怒られることはなかったけど今度の休みに一緒に買い物に行くことを約束させられた。

なのは said

黒い少年について行き見たこともない場所に転移してなのははかかなり困惑していた。レイジングハートを抱くように握りしめ回りをキョロキョロしていた。

(ユーノ君、ユーノ君、ここっていったい)

(時空管理局の次元航行船の中だね。簡単にいうと幾つものある世界を自由に行き来するための船)

(あ、あんま簡単じゃあないかも)

「ああ、いつまでもその格好というのは窮屈だろう。バリアジャケット

なのはの悲鳴がアースラ中に響き渡った。

「え、えっと、ユーノ君ってふえええ！？」

「君たちの間で見解の相違でも」

「なのは、僕たちが最初に出会った時ってこの姿じゃあ？」

「違うよ最初からフレットだったよ」

なのはにそう言われてユーノは腕組をして初めて出会ったときのことを思いだす。

「ああ！、そうだった。ごめんごめん。」

「だよね。そうだよね」

なのはが、うん、うんっと何回も首を縦に振る。

「おっほん、艦長を待たせているんだ。そろそろいいかな」

「はい」

若干、怒り気味の少年を見て二人は申し訳なさそうに返事をした。

「艦長、失礼します。」

少年に艦長さんが待つ部屋に案内してもらった。

「ふえ!?!」

その部屋は、純日本の茶室みたいになっていた。部屋の中央には、緑の長い髪の女性が座ってお茶を飲んでいた。

「艦長、現地の魔導師の二名をお連れしました。」

「ありがとうございます、クロノ」

「お疲れ様、二人ともどうぞどうぞ楽しんで」

「どうぞ」

そしてなのはとユーノは靴を脱いで畳の上に移動する。明らかに周りと場違いな物が置いてあると思いつながら。

「なるほど、そうですね。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「はい、それで僕が回収しようとして……」

座るとこれまでの経緯をユーノが話し、自分のせいでこうなったのだと説明する。

「立派だわ」

「だが同時に無謀でもある」
そう言われ、ユーノは落ち込んでしまいがなの　はが質問をする。

「あ．．．ロストロギアって何なんですか？」

「遺失世界の遺産って言うても分からなかった　わね。えっと次元空間の世界にはいくつもの世界があるの．．．．．」
とリンディがロストロギアがどのような物かを　わかりやすく説明していった。

「あなたが探しているロストロギア、ジュエルシートは次元干涉型のエネルギーの結晶体。　いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし最悪の場合、次元断　層を引き起こす危険物」

「君とあの黒衣の魔導師がぶつかった時に発生した振動と爆発、あれが次元震だよ」

クロノがそう言うとなのははその時の事を思い出していた。

「たった一つのジュエルシードの何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。複数個集まっただけの時の影響は計り知れない」

ジュエルシードの与える影響の凄さを教えるのだった。

「これよりジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「君達は今までの事を忘れ、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも・・・そんな・・・」

クロノが危険だから忘れろと言うがなのは食 下がる。「これは、次元干渉に関わる事件だ。民間人が介入していいレベルじゃない。」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜、一晩ゆっくり話し会ってそれから改めてお話をしましょう」

リンディはそう言ってなのは達の答えを急がさないようにしておいた。

「はい」

そして、リンディはクロノになのは達を頼んで元の場所に帰らせた。

なのは said end

艦船アースラ

昼間の戦闘の映像を管制官のエイミィとクロノは見ていた。

スクリーンには、なのは・フェイト・ひかるの3人が映し出されて

いた。

「凄いや、こっちの2人の子達は、どっちもAAAクラスの魔導士だよ」

なのはとフェイトの画像を拡大する。

「白い服の子はクロノ君の好みぽい可愛い子だね」

「エイミィ！そんなことはどうでも」

「魔力の平均値をみてもこの子で127万。黒い服の子で143万。最大発穿値はさらにその3倍以上。魔力だけならクロノ君よりも上だね」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃあない」 ムツとしたのかくどくど説明しだした。

「はいはい、信頼してるよ。なんたってアースラの切り札だもんね」

「……………」

納得いかないというふうな顔をしていた。

「でも問題はこの子なんだよね」

最小化していたひかるの画像を拡大する。

「アースラの魔力サーチャーがクロノ君が攻撃されるまでリーダーに映ってなかったんだよねえ」

「あれは、流石に危なかったよ。彼女たちの話によると僕が来るよりも前から居たらしい。」

「そうだとしたらサーチャーに反応が無かったのが不思議だよね。この子は恐らくSクラス以上の魔導士だね。魔力値も200万を超えてるし」

「ああ、それに使っている魔法は、僕たちミッドチルダのものとは違うみたいだった。」

くくく
夜 高町家

父さん達が稽古に出かけた後、なのはが母さんと話をしていた。

「それはもういつだって心配よ、お母さんはお母さんだからなのはとひかるのことはいつも心配よ」

「……」

「なのはがどっちにするか、まだ迷ってるなら……危ない事は、ダメよ！ って言うと思うけど……でも、もう決めちゃってるんでしょ？友達と始めた事、最後までやり通すって、なのはが会ったその女の子と、もう一度話してみたいって」

「……うん」

「じゃあ……いってらっしゃい、後悔しないように優しくなのはの頭を撫でる。」

「うん。ありがとう、お母さん。」

それから次の日、私はユーノ君と一緒に管理局の船に向かいました。

無印第9話『決戦は海の上でなの』

第9話『決戦は海の上でなの』

なのは said

艦船アースラ

なのは達がアースラに乗り込んでから10日が経っていた。ジュエル・シードも、順調に集まり残りは6個まで集まっていた。でも、ここ2・3日ジュエル・シードの手掛かりもなく艦船待機が続いていた。

「なのは、ごめんね」

食堂でおやつを食べていたら不意にユーノ君が謝ってきた。

「寂しくない？」

「別にぜんぜん寂しくないよ。ユーノ君と一緒にだし。小さい頃はこっぴつことよくあったんだ」

「うち、私がまだちっちゃい頃にね、お父さんが仕事で大怪我しちゃってしばらくベットから動けなくなったところがあるの」

静かに昔のことを話した。

大怪我をしてベットから動けないお父さんの看病をお姉ちゃんが始めたばかりだった翠屋をお母さんとお兄ちゃんて切り盛りしたことを話した。

「だから、私わりと最近までひかると2人で家にいることが多かったんだ。今は、ひかるは居ないけど、ユーノ君がいるから寂しくないよ」

「なのは・・・」

ウィーン、ウィーン

突然、艦内にアラームが鳴り響いた。

「なのはー!」

「あつ」

2人は、急いでブリッジに向かった。

ブリッジ

モニターには、海鳴市の海が映し出されていた。

「なんとも、呆れた無茶をする子だわ！」

そこでフェイトは、海に向かって大威力魔法を行使していた。

「無謀ですね、間違えなく自滅します……あれは、個人が出せる魔力の限界を超えている」

ウィーイ

「フェイトちゃん!!」

なのはが、ブリッジに駆け込んできたときには、発動したジュエルシードの影響で竜巻が発生し、フェイトは、それと対峙していた。

「あの、私達急いで現場に！」

助けに行こうとするなのはクロノは非情なことを口にする。

「その必要は無いよ。放っておけばあの子は自滅する」

「!!!!!!」

モニターには、必死に戦っているフェイトが映る。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たした所で、叩けばいい」

136

「でも!」

「今の内に捕獲の準備を!」

なのはを無視してクロノは命令を出す

「了解」

「私達は、常に最善の選択をしないとイケないわ。残酷に見えるかも知れないけど、これが現実」

「そんな…」

「(行って!)」

「!」

ユーノからの思念通話が入ってきたのだ。

「(なのは、行って!)」

なのはは、後ろを振り返る。そこには、ユーノが立っていた。

「(僕がゲートを開くから、行ってあの子を)」

「(でも、ユーノくん、私があの子と……フェイトちゃんと話

をしたいのは、ユーノくんとは……」

「（関係無いかもしれない……ただ僕は、なのはが困っているなら、力になりたい。なのはが、僕にそうしてくれたみたいに）」

とユーノが言うと転移ゲートが光る

「……」

「君は！」

ユーノの横を通るときに目を合わせて、少し笑った。そして、なのはは、ゲートに乗った。

「……！」

「ああ!？」

クロノ達が駆け寄ろうとするが、ゲートの前で両手を横に伸ばして、誰も通せないようにゲートの前にユーノが立つ

「ごめんなさい」

「高町なのは、指示を無視して勝手な行動を取ります！」

ユーノが手で印を作る。

「あの子の結界内へ、転送！！」

そして、なのはは、消えて行った。

「君はいつたい何を考えているんだ！」
クロノがユーノに詰め寄る。

「クロノ執務官、行ってしまったものは仕方ないわ。あなたも万が一に備えて準備をしておいてちょうだい」

「・・・わかりました」

ブーン、ブーン

「更に、別の魔力反応が当海域に接近中です」

「クロノ君、この魔力反応は銀髪の子のだよ」

「このタイミングで！？エイミー転送の準備だ」

~~~~~

海鳴市の海上の上空には、巨大な黄色の魔法陣が浮かび上がっていた。そして、魔法陣の近くには……フェイトがいた。

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ。いま導きのもと、降りきたれ、バルエル・ザルエル・ブラウゼル……」

すると、魔法陣から何本もの雷が海に落ちる。
。そして、雨も降ってきた。

「（ジュエルシードは、多分海の中。だから海に電気の魔力流を叩き込んで、強制発動させて位置を特定する・・・そのプランは、間違っていないけど、でも・・・フェイト!）」

「撃つは雷、響くは轟雷、アルカス・クルタス・エイギアス・・・」

フェイトの真下には、巨大な魔法陣、真上にまるで、黄色い目のような丸いものが浮かび上がっていた。

そして、それは何個も出てきて、お互いを電気で繋いでいる

「はぁーーーーー!!!」

フェイトが魔法陣の中心にバルディッシュを突き刺した

すると、何個もある黄色い魔法陣から、海に電気を流し始める。
すると、波が荒れ海から水の柱が6本出て来た
。それは、フェイトが強制発動させた・・・ジュエルシード

「見つけた、残り6つ……」

6本の水の柱を見て、息遣いの荒いフェイトはそう呟いた

「（こんだけの魔力を撃ち込んで……さらに全てを封印して……こんなフェイトの魔力でも、絶対に限界越えだ！。アイツの助けがないと）」

「アルフ、空間結界とサポートをお願い」

「ああ、任せといて！」

フェイトの言葉にアルフは、頷く

「（だから、誰が来ようが、何が起きようが、あたしが絶対守ってやる！）」

アルフは、フェイトを絶対守ると自分の胸に決意する。そして、ジュエルシールドが暴れだした。

「行くよ、バルディッシュ、頑張ろう」

「Yes sar」フェイトはバルディッシュを構えて、ジュエルシールドに向かって駆け出した。

やはり、大魔法を行使したせいかもしれないもよりスピードにキレがない。襲いかかってくる水柱をかわし懐に入ろうとするが死角からくる水柱にやられ、本体になかなか近づけない。

「(やっぱり、無理だよ)」

そして、6本の水柱が一斉にフェイトを襲う。

「フェイト!!」

とっさに、防御魔法を展開し、なんとか受け止める。

「っ……大丈夫」

ハーケンフォームのバルディッシュを構えなおし、相手を見据える。

「（このままじゃあ）」

ザシュ

不意に、一本の水柱が真つ二つに斬られた。

そして、

『すまない、遅くなった』

リーナとユニゾンしたひかるがフェイトの前に現れる。

「えっ、どうして」

「ごめんフェイト。私が呼んだんだ。フェイトの負担を減らしたかったんだ」

ドォーン

さらに別の角度からピンクの砲撃が水柱を弾く。

「フェイトちゃん!」

雲の間からなのはが現れる。

そして、フェイトの隣に立つとレイジングハートのコアをバルディッシュのコアに近づけた。

「手伝って、ジュエル・シードを止めよう」

そして、なのはのピンクの魔力がバルディッシュのコアに溶け込んだ。

「Power charge」

光を失っていたバルディッシュのコアが輝きを取り戻す。

『僕が水柱を押さえるから君たちは本体の封印することに専念しろ』

ひかるは荒れ狂う水柱に向かっていった。

「3人できっちり2つずつ。せーので封印」

『わかった。ミイーナ、まずは奴らの動きを止める』

（はいです。我、聖なる輝きのもとに、悪しきものに隷属の枷を）

『（ホーリーチェーン）』

水柱の根本に魔法陣が現れ、そこから白鎖が突如飛び出して6つの水柱に絡みついた。しかし、荒れ狂った水柱をすべてを抑えることができない。

146

「ストラゲル・バインド」

緑の鎖が同じように巻きつく。更に、オレンジの鎖も伸びてきた。

『ユーノ、アルフ!!』

雲の間からユーノが現れてバインドで水柱を捕まえる。

「サポートなら任せて」

「フェイト、今だよ」

『なのは、フェイト!!!!!!』

「いくよ、フェイトちゃん」

なのはの足元にピンクの魔法陣が浮かび上がる。

「……バルディッシュ」

同じようにフェイトにも黄の魔法陣を発生させる。『ミィーナ、バインドの制御頼むよ』はいです。』

『ライオンハート、カートリッジ・ロード』

2発の薬莖が飛び出しひかるにも魔法陣が浮かび上がる。

「せーのっ!!!!!!」

「ディバイーン（サンダー）『シャイニング』」

「レイジ!!!!」

「バスター!!!!」

「バスター!!!!」

白、ピンク、黄色の砲撃が発動しているジュエルシード全てを呑み込む。激しい閃光と爆発が辺りを覆い尽くす。

(ジュエルシード、6個全て封印完了です)

『ふう』

ブッスウー

ライオンハートから大量の煙が吐き出される。

そして、封印されたジュエルシードを囲むように、なのは、フェイト、ひかるが向かい合った。

(さて、ここからどうする?、どうしたらいい?)

(なのはさんの様子を見ては)

3人が向かい合ったとは言え、なのはは完全にフェイトの方を見てる。そして、フェイトもなのはの方をずっと見ていた。

(僕はどうしたら、2人とも眼中にないし)

「友達になりたいんだ」

なのはの言葉に、フェイトが驚き、目を見開いていた。

『なのは……………』

(!?!、ひかるさん何か来ます!!!!)

『えっ!?!』

「次元干渉!?!、本艦及び戦闘空域に魔力攻撃きます。あ、あと6秒」

なのはの近くに出てきたモニターの女の人が叫ぶ。

そして、空の雲行きが怪しくなり紫色の稲妻を発していた。

一本の落雷が近くに落ちてくる。

『ヤバい!!!』

その場を離れようと身構える。

「か、母さん」

『えっ』 母さんって……

「うわあああああああ……!!」
「フェイトちゃん……!!きゃあああ」

『なのは、フェイト……!!……!!』

なのはとフェイトに雷が直撃する。バリアジャケットは焼け焦げ二人は、海へと墜ちて行く。

『ユーノはなのはを』 (任せて)

なのはは近くにいたユーノに任せて、墜落していくフェイトに向かって全力で飛んでいく。

『間に合え!!!』

海面ギリギリでなんとかフェイトを捕まえる。

『フェイト!!!』

ぐったりとして返事がない。

「フェイト!!!」

すぐにアルフが近寄って来てフェイトを抱きしめる。

なのはの方を見ると、ユーノがしっかりと受け止めたようだった。

安心しているのも束の間、ミーナが悲鳴地味だ声を上げる。

(もう一発きますー!)

『くっ………、僕がなんとかする。2人はなのはとフェイトを頼んだよ』

「そんな無茶だよ」

『いいからやるんだ、このままじゃあみんな危険だ。ユーノ頼んだぞ』

(あと10秒です)

ユーノ「わかった」

2人をカバー出来るくらいの高度に上昇する。

ミイ（来ます）

『ミイナ、ライオンハート！！』

ミイ（シールド強化、衝撃吸収）

「Wide erea shield」

残りのカートリッジ全てを使い、半径50mはあるシールドを展開する。

スゴオーン！！！！

落雷がシールドにぶつかり轟音をたてる。

『っ
』

シールドで全てを受け止めきれず、一部突破してきた雷がひかるの体を襲う。

（ひかるさん、頑張ってください。）
ジリジリとひかるのシールドが押し負けてき出す。

ひかるの騎士甲冑も至る所が焼け焦げ、血が滲んでいるところもある。

『っ、ま、負けるかぁ!!!!』

押されてきていたのを一気に弾く返す。ひかるは、防ぎかったのだ。

『!!!!』

気がついたなのはが叫んでいるが何を言ってるのかまったく聞かえない。

『よ、良かった……無……事で……』

目が霞む……

(ひかるさん!!--!)

『ミイ……ナ、後は……頼ん……だよ』
そこで、僕は意識を手
放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2857x/>

魔法少女リリカルなのはぷらす

2011年12月17日03時45分発行